政治家として活躍した人

竹尾　弐（たけお　はじめ）

明治29年～昭和33年（1896～1958）

戦前は労農運動に奔走し 戦後はわが国の文教行政に貢献

成田市大竹に生まれる。成田中学校（現成田高校）、東京外語大学露語科を卒業し、22歳でロシアに渡る。帰国後、東京日日新聞社などの記者となったが、大山郁夫を中心とした労農運動に参加する。ロシア通でこれを生かした著作には『ソヴィエト統制経済論』や思想を離れた翻訳本『北極探検記』などがある。

戦後、衆議院議員選挙に立候補し、連続5回当選を果たし、在職10年10カ月に及んだ。国会では、文教委員に選ばれ、神戸商船大学の創設、理科教育振興法、さらに文部政務次官のとき教育委員会法の改正を行った。また、文化振興に関心が強く、文化財保護法や学校図書館法の成立、国立近代美術館や国立劇場を創設した。宗吾霊堂に頌徳碑が建てられている。

宗吾霊堂にある頌徳碑

実業の分野で活躍した人

諸岡長蔵（もろおか　ちょうぞう）

明治12年～昭和44年（1879～1969）

米屋本店の創業者　社会・公共への援助を行い名誉市民となる

成田市上町に生まれる。子どものころから病弱で、16歳のとき、ある人物から「身体は天からの借り物である」という教えに心を動かされ、心の持ち方・考え方をすっかり変えた。20歳のとき、祖父の病気見舞いにもらった砂糖から羊かんをつくり評判となる。長蔵は品質本位・低価主義を貫き、量産体制を確立し、昭和20年株式会社米屋本店を設立、社長に就任した。社会・公共への奉仕の理念をもち続けた長蔵は、道路改修事業に多額の援助を行った。また、教育や社会福祉事業などにも私財を投じ、成田市の発展に大きく貢献した。昭和39年長蔵が85歳のとき「成田市名誉市民」に推挙され、名誉市民となった。

明治35年の栗羊かんのラベル

明治32年創業当時の店舗

実業の分野で活躍した人

伊藤音次郎（いとう　おとじろう）

明治24年～昭和46年（1891～1971）

民間飛行士第二号 飛行機の製作と飛行の草分け

大阪市南区に生まれる。映画で見たライト兄弟の姿に感動し、飛行機をつくって空を飛びたいという夢を抱いた。明治43年東京飛行機製作所に入所、民間飛行士第二号となる。

大正4年、稲毛に伊藤飛行研究所を創設し、飛行士・航空技術者の養成に取り組んだ。同6年、台風によりすべての施設が崩壊したが、翌年津田沼に規模を拡充した新飛行場を建設し事業を再開した。昭和15年には日本航空機工学と社名を変えた。しかし同20年の敗戦により、元工場従業員の家族と共に遠山村（現成田市東峰）に入植し農業を営むこととなった。同41年、新空港の用地が三里塚に決定すると、音次郎は農地を空港公団に売り渡し「空港推進」を訴えた。

恵美Ⅱ号の初飛行

実業の分野で活躍した人

圓城寺次郎（えんじょうじ　じろう）

明治40年～平成6年（1907～1994）

記者から日本経済新聞社社長に「新聞文化賞」を受賞

成田市下方に生まれる。成田中学（現成田高校）卒業後、早稲田大学に入学する。

昭和8年、同大学を卒業し日本経済新聞社の前身「中外商業新報」に入社。同13年、30歳で同社の経済部次長となった。同15年6月から1年間の欧米視察を行い、日米の国力の差を実感して帰国。同21年「日本経済新聞社」と改称され、次郎は編集局長・理事となった。同29年常務取締役、同43年社長に就任。翌年にはテレビ業界への進出を果たす。コンピューターによる新聞編集システムを推進し、同51年に完成させた。文化・芸術にも造けいが深く、多くの美術展を開催している。平成元年「新聞文化賞」を受賞する。

コンピューターによる新聞編集システムを完成

実業の分野で活躍した人

浅井礼三（あさい　れいぞう）

大正6年～昭和60年（1917～1985）

成田高校を甲子園へと導いた先駆者

成田市本町に生まれる。成田中学（現成田高校）で5年間野球部員として練習に精を出した。昭和10年、早稲田大学に入学し野球部に籍を置いた。同15年、春季六大学野球で首位打者となり、強打と硬い守備で百万ドルの名外野手と呼ばれた。その後、大昭和製紙に入り、実業団野球でも活躍する。

礼三は母校の成田中学野球部の練習に、早稲田大学のスパルタ式練習を取り入れ指導にあたる。昭和21年、第二次世界大戦が終わって再び甲子園大会が開かれ、成田中学野球部は21・22・23年と3年連続甲子園への出場を果たす。コーチを務めた礼三の熱血指導が、甲子園連続出場をもたらした。

強打と堅守で活躍した礼三

都市対抗野球で優勝

学術・文化で活躍した人

神山魚貫（かみやま　なつら）

天明8年～明治15年（1788～1882）

独学で「百人一首」を学んだ田園歌人

成田市飯岡（いのおか）に生まれる。幼名を周助といい、後に三郎左衛門（さえもんのじょう）を襲名し、松廼舎（まつのや）、無境庵（むきょうあん）などとも号した。

魚貫は、片田舎で教えを受ける師匠もなく、ただ「百人一首」だけが唯一の教科書であった。農耕に従事しながら、朝夕詩歌に精進した田園歌人であった。『苔清水（こけしみず）』の序文には「百人一首の穏やかで柔らかい調子が忘れられず、和歌を詠もうと決心した」と書かれている。魚貫が詠んだ和歌は、2万首を超え、歌集に『苔清水』『苔清水後集』『苔清水後々集』『麻葉（あさば）和歌集』がある。江戸の後期から明治の初期にかけて魚貫の名は広く知られ、門人が170余名になり、その中から、伊能頴則（ひでのり）、椿仲輔（なかすけ）、鈴木雅之などの国学者を輩出した。

88歳の時に詠んだ和歌

代表作『苔清水』『苔清水後集』